



壺中爐談

全

789
860





壺中爐談

喫茶大槩

たりん、海より東へ南へは、茶の産地と云はれ、
 治を以て茶也、三沸神魂を雲に七盤に雲り
 通るる、祥なり、漢如古令、是を雲ひく、
 遠日に茶は物、事柄の危り、明志より、
 瓶の時、茶より、美は、以て種初ら、
 福と云ふは、考へ、茶、年中、行交、
 茶とて、増よ、茶は、賜ふ、事、有る、
 して、茶、あり、の、や、く、有る、
 者、も、大、因、も、茶

日本記三元年
六月修仁王
會ラテ宮中ニ
トコロナラハ
シ

園侍あり申渡梅乃尾の何と人々申す葉の樹
 極物多きと云ふ一ヤと云ふ事には侍と云ふ凡
 行年天正の年六月末殿乃申官僧百と云て
 大福を講せしむり才二日め小引葉は
 あり年毎より一と負觀年申さるとあり明
 惠上人の 後鳥羽院の御宇めして降世遠く後
 寺り明惠院に考ふに 命好一子光也作命
 帰羽乃後葉乃美を明惠に贈る 歸梅の尾より
 此所一記あり千光輝下又曰一題ありて河州の
 後葉の葉と梅葉と御福寺地内は山背張山極

きねり一記せりし御福寺ハ日本福判の始也千
 光軍基にして鎌倉の地なり 賴朝公ト告て創設
 あり也 後鳥羽院帝に奉々々 披藥室に物福屋
 此類字を覆指し賜ふ今も此て山門の面は奉之
 御福寺内より背張ふめと今も奉々々と云ふ
 之は存合せり此等には考ふれと千光明惠の
 御申日中に奉々物初らると云事好くは人れ
 かりは諸命を加へたりと云ふ 明惠の光也葉
 御好く是に奉々武武切破と云ふ御好くは
 て人は是ら候と書せし侍も是御好くは奉々

利トハ寺ノ事

實朝御瘡
頭風故事出
東鑑

夢の寝るに事よるにぬきは國師室祖の政風は
實朝御瘡治すも一平九四記の明かり物に
時下業乃始りて世人の徳徳も且好り世日本
にゆれ福しき業も天徳生し来りてふと
一樹別字治し是よりゆり自然の生有
法善光院慈照院の時皆と他の好しを奉
ふと法善と七柱乃及是と今の夜及一其の
事由は月がしり終る中侍と代り
大樹中侍と業連は時子せらるるに其の
夢に書きしふく夢を成たり

業式大業

善光院慈照院乃河時風流花輪長一法善
法相意味佳者其花台酒はわはれ全好も補を
く世のふく霧遇ふを良は朋の阿は等此
風流は法し一揮板遣柄机洞垂厨子足欄
及びてりて折人の好は並一飾は殊も是の
規矩は定を始成と初を天より中はは地
かゝる事柄の巻をいふ中好く書院を此
用体居るにや相傳たのや

能阿彌 — 空海 — 北向道陳

利休宗易 — 南方宗啓

珠光 — 宗陳 — 宗悟 — 紹鷗

能阿彌珠光は二流傳へてきてとて利休より及
庵より利休は名譽四弟として道徳の事ありしに
紹鷗一學の家通として世より承らるる道徳の
門合て興四弟紹鷗の門下にいはゆる利休とて
是傳説と陳と名をいふは流しなり

南方宗啓は始宗慶前法皇有る利休の南方宗啓は

既集聖意の増より集意名の宗意と名を冠すは

一休和尚より南坊と云へ一休の号せしこと一別號之

宗意と名を乃副美之副美は利休の字なり

既集聖意の増より集意名の宗意と名を冠すは

市中其方の時由坊集意を慶前に號し一ぬ今の

集意高ハ法皇也再興して宗意ハ利休名也

乃二の字之利休之より稱法小衆一宗意ハ法皇名也

一利休清規の同く法皇名也といふことあり

勿論宗意ハ宗意也門下より宗意と名を冠すは

規正紀一馬路下聖者一兼道中の中
 魏せりあるけ語に地以て書院を
 子に不州おほく云休乃遺書に
 兼好の好むものなりと語導た
 兼好の好むものなりと語導た

利休家傳の系如左

利休宗易

道安眠翁
 少庵宗淳

不審庵拋笠齋

此は休の
 号也

天正十九七月朔辛

宗且

今日名吐魯元休云

閑翁宗拙

江守宗佐

建隆毎江守

良休宗佐

良休毎建隆

宗佐

覺毎原叟

今嘉治是也

仙叟宗室

常叟宗安

後宗室ト云

恭叟宗安

竺叟宗乾

宗室

今嘉治是也

一公羽宗守

宗守

三男家也

少庵と云ふ事あるも嫡子として利休切腹の海潮
 生氏は宗守の孫にして宗守に似て氏は休の門下
 有故ゆへに宗守の嫡孫と見ゆべし

秀忠公は河内守高直の末子に賜はれ、
病身ゆゑ、東米所の米勅等、
以て懐妊の終る、米地を辭し、
休め、ツキ宗た、
宗室相續圖のや、
今の大い、
室を、
宗室相續圖のや、
今の大い、
室を、
宗室相續圖のや、
今の大い、
室を、

古事記、
ら、
及、
四、
竹、
室、
公、
此、

多量なる意味を以て由縁あり作用甚だ強固是
空は無常即ち之に應と應一統中書院探りる
乃指式と并居の二派派記とて一統一利休宗
語之も一統記とて一統一利休宗の二派別を
記し出せり

草庵兼味大藥

根幹より後来利休の兼世は流石一大家秀吉
氣過地は異なりして法中法眼あるより由
丹州信者一統一統一利休宗の二派別を
記し出せり

西親町帝より勅許賜りて利休宗あり居と稱
之に於て并居の式と稱して流して兼世の二派と
法中法眼あるより由の二派別を記し出せり
の法とて是を兼味大藥と稱す一統一統一利休宗の
凡兼味大藥とて法中法眼ありて流して兼世の二派と
印集ふ兼味大藥とて法中法眼ありて流して兼世の二派と
いと由式と稱す或は別記一或は兼味大藥と稱す
兼味大藥とて法中法眼ありて流して兼世の二派と
兼味大藥とて法中法眼ありて流して兼世の二派と
兼味大藥とて法中法眼ありて流して兼世の二派と
兼味大藥とて法中法眼ありて流して兼世の二派と

東三條より西三條の間にありて、
地を以て別れの所と爲す。此の地は、
軍物運搬の爲す。軍物運搬の類は、
とほとほ多し。此の地は、
りて、此の地を、
於て、
の海ありて、
兼て、
二世終に、
しげ二重の、

廿八日、
考者、
美説、
室より、
何れ、
既り、
流傳、
せし、
体檢使、
變、

切

穉世乃頌曰

人生七十力回希出
吾這寶劍祖佛共教

世に我は是是れをいふはるる今時時を天に抛
と居士は是るありし世人の智の徳を親に
養ふところを居士のついでたりしも恵化り
兼く中身の徳をいふ徳は流一徳は徳をいふ徳
徳志は徳をいふ徳は徳をいふ徳をいふ徳を
汗脚の心でいふ徳は徳をいふ徳をいふ徳を
徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳を

以後兵業地をいふ徳は徳をいふ徳をいふ徳を
重徳は徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳を
天の下の平らな地をいふ徳をいふ徳を
ありし徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳を
小徳の徳に徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳を
徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳を
徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳を
徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳を
徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳を
徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳を
徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳をいふ徳を

抑ひ〜の所、治世のりめ、世に母の徳あり
あり〜の徳を〜念〜あり〜に志を絶つ
好まじし〜古風と申すは、
何れに〜の意を〜
要終るは、歸るは古風の徳を、
知り〜 古風古徳よ〜

家之云々、沖原宛、秘を〜、
この風俗、古今に秘載〜、
好事に〜、
藤原が意の、徳神を申す、及〜

古風小を、体の法風、
兼、境界と武の〜、
申す〜あり、
河向ら、茶道の、
詠人の、
を考むる、
條の、
学、
今、
古風古徳小腐〜、

進んでよりとくく道加は物申 徳を古よりとく
るるも亦体よりのお傳るく有るも然るもわらも
物さるも体のつりはよもとくく体の可成とも
をさるもな押しつる事さるも及りは彼を常
にこそ喚ふ事常陽ふあり是より學して一流を極め
き然るもあに事今よりこそ古威の力量はる
徳をてた。然りぬ事よ亦亦師の徳をさるる
小をさるるものあり彼が學を事よ回利徳風と
小遠風と古のさるる事よ世人より事には
回さるる小をの回利徳と日如榮の陽乃え

徳さるる後身よあさるる茶は陽と好く利徳
流の卯ある也。流をさるる海。とあるよ
利徳の文や。のさるる大禪師。達の事。海
にも者らるる者。然るる。但徳は人の名
瑞さるる。遠事ある也。維合の四陽の
程さるる。徳とさるる。意あり。徳あり。戸に
はるる。頼みい。茶の道よ。而此法道皆然り。利
徳を茶よ。地い。ゆ。け。は。は。徳とさるる。人。て
茶の業を。法風を。徳あり。その徳よ。再行
ま。さ。る。る。我。等。と。さ。る。る。及。徳。と。い。わ。る。ん

古蔵や我輩武つは身御前 夜命に意し唯
一市に流くふ市に流く小住浦は流と流にねき
志を相変ぬともむよとのこわおしと侍き高枕
好高屋の大陣はり用はせの事し自己の業乃
満るは利は風印したるはしと申す人よ見
智も此の拾遺と我の業の流の川の事とる
さやしとるはとるはとるはとるはとるはとる
以て休の風にまると人の事と流のまこと
と流はとるはとるはとるはとるはとるはとる
遠の川後に流風はとるはとるはとるはとるは

武つは身御前 夜命に意し唯
一市に流くふ市に流く小住浦は流と流にねき
志を相変ぬともむよとのこわおしと侍き高枕
好高屋の大陣はり用はせの事し自己の業乃
満るは利は風印したるはしと申す人よ見
智も此の拾遺と我の業の流の川の事とる
さやしとるはとるはとるはとるはとるはとる
以て休の風にまると人の事と流のまこと
と流はとるはとるはとるはとるはとるはとる
遠の川後に流風はとるはとるはとるはとるは

業内証一の報

一 自來の事、昔の歌とよむ白く河に流る所ある
一 鷹と山雀とて客鳥と入魚と一鷹を食ふ
一 て葉飯の徳は石偶の徳も又好く一葉飯は
樹る方好く種を山に下る好葉を是とす
道に帰る也

一 沸湯松風より入の種多し、其の言再集湯水
火おのさるる事、多思

一 唐の唐印にぬる事、世に難法古集林あり
一 宿主歴然の會所言令之入魚とす

一 會始終二時、其の魚とす、其法活法、活よ
時抄らるる事、多

天正十八年九月上三

南坊在判

右に七ヶ条、八条、有る、其法也、學業、業、不可忽
者也

宗易在判

靈代の政中、そのむけ、官示、一、其、徳、徳、とて
大途より臨着せし、其、二、師の法、切、業、有る
人、千載、の、事、よ、其、道、誰、作、其、徳、と、人、千
載、の、事、よ、其、道、誰、作、其、徳、と、人、千

又、保、中、休、居、其の、徳、も、其、徳、ハ、た、く、其、徳、の

卯の道なるに心の榮枯をわらへし

草庵大槩

釋氏要略より曰^草と云く^草住と地^草の^草と爲^草
いふと^草銀^草の^草同^草書^草院^草基^草を^草た^草成^草と^草世^草の^草法^草之^草理^草を^草
文字^草に^草真^草の^草や^草一^草規^草規^草を^草し^草の^草也^草と^草世^草の^草法^草之^草理^草を^草
象^草比^草を^草爲^草の^草出^草世^草の^草法^草の^草一^草と^草世^草の^草法^草之^草理^草を^草
乃^草也^草一^草自^草由^草と^草然^草の^草如^草不^草有^草と^草云^草維^草新^草の^草曰^草
心^草淨^草は^草ま^草を^草別^草を^草た^草し^草淨^草一^草又^草大^草臨^草の^草市^草朝^草の^草
如^草所^草と^草也^草一^草と^草世^草の^草法^草之^草理^草を^草た^草成^草と^草世^草の^草法^草之^草理^草を^草
忘^草底^草の^草あ^草る^草ま^草を^草柱^草の^草よ^草り^草ゆ^草ひ^草き^草る^草法^草の^草不^草可^草無^草

只の代平坦にたれり^草魚^草一^草の^草何^草如^草の^草大人^草を^草あ^草
と^草い^草境^草に^草入^草る^草と^草世^草の^草法^草之^草理^草を^草た^草成^草と^草世^草の^草法^草之^草理^草を^草
端^草破^草一^草と^草雲^草卯^草の^草あ^草る^草と^草云^草正^草史^草の^草あ^草る^草と^草云^草也^草
或^草は^草い^草ふ^草と^草流^草体^草の^草証^草一^草

雲地好意を容し主も^草也^草と^草云^草と^草云^草に^草い^草ら^草り^草
と^草い^草けて^草陽^草の^草也^草一^草

凡好意を好意道より^草知^草つ^草る^草事^草と^草云^草と^草考^草る^草
に^草好^草意^草と^草好^草意^草と^草因^草一^草と^草唱^草一^草と^草其^草の^草也^草と^草云^草
是^草り^草好^草意^草と^草史^草記^草を^草爲^草す^草の^草傳^草は^草史^草記^草を^草爲^草す^草に^草好^草意^草と^草
注^草小^草勝^草度^草曰^草作^草事^草好^草不^草偶^草又^草常^草廣^草を^草爲^草す^草に^草好^草意^草と^草

零時零
餘也
ル數之零

情ありしはくわたり師古くは命長偶合と云
凡れ其の零際には事なきかゝり好むて曲のおと好む
らざる情ありしは減りて事なき如新ありしを
しして世に偶々に信よる好むもそのいおる
就名好む事なきといふ樂といふは一考の道人好む者
稱もあはれしといふ松樹竹の極曲直言あつた
留せしと下は偶々その好む一考は家屋好
奇屋といふは稱を氣取しといふ古新煙を長
能換少式といふは情を補ひ好むると云ふ如
少い角より偶々事ありし一考は家屋好む道

とは其の稱をいふ月長排能合及奇といふ偶
と事半曾計し極くは又奇偶二日奇は又偶
偶又奇環能合情の事いふといふ事古は昔といふ
及しは好事は家を風流といふ好むといふ事
好むといふといふ事其の事といふ事久し遠近あり世
間の事といふは皆おとる事といふは事あり
といふといふ事其の事といふ事いふ事いふ事
乃二事世に理はしといふ事其の事

意あふ事

云はれりも問ふ者といふは其の事いふ事いふ事

若くは神ありて求むるを以て用ゆるは神あり
よとばしは神ありて用ゆるは神ありて用ゆる
に是を以て用ゆるは神ありて用ゆるは神あり
とて用ゆるは神ありて用ゆるは神ありて用ゆる
理別は神ありて用ゆるは神ありて用ゆるは神あり
とて用ゆるは神ありて用ゆるは神ありて用ゆる
好りて用ゆるは神ありて用ゆるは神ありて用ゆる
日月星辰の奇なりて用ゆるは神ありて用ゆる
子孫不絶一人といふは神ありて用ゆるは神あり
悦び用ゆるは神ありて用ゆるは神ありて用ゆる

是事を知りて身は神ありて用ゆるは神あり
知足の如きを得ざるは神ありて用ゆるは神あり
三つは神ありて用ゆるは神ありて用ゆるは神あり
うとて用ゆるは神ありて用ゆるは神ありて用ゆる
目利者高きとて用ゆるは神ありて用ゆるは神あり
用ゆるは神ありて用ゆるは神ありて用ゆるは神あり
の目ありて用ゆるは神ありて用ゆるは神ありて用ゆる
世人の福ありて用ゆるは神ありて用ゆるは神あり
及用ゆるは神ありて用ゆるは神ありて用ゆるは神あり

今見れば人々のまはた嬉なり小童の元を為し
甘好しと詠ふしやういふるなまの何れめそ
何の人はふらむらむの嫌やまの一人あく好く
好む可なり志しきと休め勝たぬとたふし舉
て祐しと申しはこころをうらはせと云を奉ら
ぬし我より仕合好きとまを道に即ぬ人の後
なま利休を我の一風也とてしたはちとあは
れするあまもし業も出さぬとあはせしに
と時代のあまも今もあてせよ孝教とていふ
休の業はあはれとて道長の新書に書しは

休は仁愛とていふとて一と書れぬあはれ
あはれ我おとそし自己の道ににそ一風業に
出いぬあまもたれぬとていふ人の好むる
あまもあまも孝教とていふる業はあまも
名我等ばたて道長とていふる業はあまも
とていふる心は嫌なりとていふる業はあまも
あはれは命儀とていふる業はあまも
機嫌とていふる業はあまも
いふる業はあまも
とていふる業はあまも

淡くもよみ半々茶人の心事一の
中も懐柔ありし一の同く感懐と云ふ又いふ
浪跡村体の楽も云々

久渡をよみ兼とお茶もなるなり

浦也の官をり稼の心も言 定家卿

世にのこ侍らん人の中へ心も

とある世の中をよみ兼やお茶もなるなり 家隆卿

とくふいふ首能付しりしとて常に沈吟せし

とくふいふ首能付しりしとて常に沈吟せし

花お茶の官をり稼と好く別あり

唯一人の心をよみ兼とお茶もなるなり

書録真偽大懸

世に懐柔を懐柔書に判体の書といふものあり
千氏の氣に地をて具よ尋老ふもく懐柔只
体も名なりて懐柔をて懐柔といふものありし
いふものありて居士の懐柔の語いふものありて
懐柔に秘して懐柔を懐柔といふものありし
懐柔を懐柔の風を懐柔の語いふものありし
馬馬と好りて懐柔の語いふものありし又馬且
風と好りて懐柔の語いふものありし懐柔の清風乃

きくは事おまかりしと云ふらんといふ目と
体り嬌強あまの生受ふ然の一奇にまをく
格式は古観多は流しまるに流れては自然り
観能はつり合ふ一多處の指すまの地位と境
境なき湯をとり一筆は点てといふ一境よ
端なき一と云ふものなるに比ぶるは
あまのあつと少破の二風にのこしをよめる
そりしと云ふこと多味を味を法を法を
解は底り人好く奇存り可作異風は美の
流説とのと好くえよといふよ遠年一と

たゆむに集まはる全備り書好
凡論道の法武境に下りては傳り根成り
まはるは伝は傳集り書と云ふ的にお
兼面は乃親切に志を事好く殊と茶三味乃
一法漢和友を傳りものたわも伝鶴利体法
味は泉流りて流り可謂傳り中と茶の茶
茶無好味少りて流りて中乃臨流との
り事理に徹り境り入る自り云ふといふ
体といふ下りては傳り好く書好く編
茶茶等ありて集りては流りては流りては

教乳七人の所ある一早く焼却せしめて
之書千部一冊を惜むべし悲しむべし
其の邦の茶と其少産に口授一十年坊圃の
精意も千部傳書に不及意に成るべし
見ゆべし書院の蔵子に書とせしめて傳へし
江戸中一古く高麗茶房とて傳へし江戸
の一書に所しし心付得し書院に心付
所く書に所しし心付得し書院に心付
同好の嗜愛は心付得し書院に心付
志の傳ふと傳ふと心付得し書院に心付

式を洞原に山流すすまらるる

百年荆棘ケイキキヨク密

露地耐寒衣スエタリモノ裳

爐火紅一點

井花洗鐵テツ錫カ

ふんえを道ありしむあり

しんじん 坊主の 坊主の 坊主の

松處士毛錐士之二客交接之爐談也

紫陽松月庵實山書

讀實山居士壺中爐談

草菴露地淨無塵 一味松風主對賓
物外交情談中趣 知心獨許捧炉神

卍山左衽書印

寶山自筆和書孫台無相違者也

道極朱印朱印

● 三沸

茶經其沸如魚目微ホツト小キ湯玉ヲ有聲為一沸一魚目ニ余ユ綠
邊如涌泉連珠為二沸湯ノニエアカルヲ涌セニ
珠ユルナリ騰波鼓浪為三沸タトヘテ湯玉ノ多キヲ連
テ不可食也三沸ヲ過シハ老湯トナリテ

● 七盞通仙靈

茶經外集盧仝茶歌云一挽喉吻潤コウフニラ二挽破ハス
孤悶コト三挽搜枯腸サグルコ惟有文字五子卷テウラタ四挽發輕ハツス
汗カシラ平生不平事盡ク向毛孔散テ五挽肌骨清ク
六挽通仙靈キツ七挽吮スル不得也唯覺兩腋習ヲホク々リヤツ々エキ々シツ

清風ノ生ル蓬萊山在ル何處ニ

● 盧玉川 茶經外集茶歌アリ

● 鬪茶 茶經外集采ノ范希文カ鬪歌ニ曰鬪茶

味ラ兮輕醞鬪茶香兮薄蘭芷ヲ

● 丹丘子 茶經曰永嘉中晋懷帝餘姚人虞洪

明ノ浙江紹興府寧波府古ノ會稽餘姚ノ地也入瀑布山採茗遇一道士

云吾丹丘子明ノ浙江台州府寧海縣ノ南ニ丹丘

祈モトム子他日甌犧之餘乞フ相遺レ也犧木拘也今

常ニ用レ以ニ梨木ヲ爲之

● 神異記魏方朔著ス漢叢書ニ出ル餘姚人虞洪入山採茗遇

一道士牽テ三青牛ヲ引レ洪至瀑布山曰予丹丘子

也聞子善具フ飲ラ常思見シテ惠山中惠山在常州府無錫縣

有大茗可以テ相給ス祈ム子他日有ニ匪儀之餘乞相

遺レ也因テ立ニ奠祀後常ニ令ル家人ヲ入山獲大茗焉

換骨

陶弘景カ雜錄明梁ノ如士傳ニ陶弘景字ハ通苦茗輕換

骨ラ本草綱目ニ此ヲ引テ苦茗昔丹丘子黃山君服

之丹丘子并見ユ黃山君未詳一統志徽州府ノ君山仙人曹阮

欽山茶棚禪林類聚卷十八欽山遼禪師

遊方時同雪峯巖頭憩茶棚店上喫茶師ノ曰

不會轉身吐氣者不得喫茶頭曰若恁麼我今日

不得茶ヲ喫云

法雲茶瓢禪林類聚卷十八曰法雲點茶茶

瓢落地見頭首門一

棒爐神禪林類聚卷四王延彬太尉因到招

慶煎茶次時朗上座與明招把鉢忽翻却茶鉢尉

見乃問上座茶爐下是何朗云捧爐神尉云既

是捧爐神為甚麼翻却茶鉢朗日事官予日失

在一朝尉拂袖使去云

中書授命之相遠者也

不羨庵

